ISSN　1881-5251

埼玉県立自然の博物館 ニュースレター

彩の国 埼玉県

澪（とろ）

■リフレッシュオープンにむけて…… 2
■休館中に３つの共催展を実施しました…… 4
■博物館仮事務所の来訪者　～野生ほ乳類の訪問～…… 5
■ゾウ化石研究が明らかにすること…… 6
■「ジオパーク秩父」の活動と博物館の役割…… 7
■表紙解説・催し物（10月～ 12月）のお知らせ…… 8

19
2012.9

埼玉県立自然の博物館
SAITAMA MUSEUM OF NATURAL HISTORY

リフレッシュオープンにむけて

植　田　雅　浩

当館は、開設以来30余年が経ち大規模な改修工事を行うことになり、昨年の９月から１年余り休館しています。この改修工事では、施設の安全性やアメニティーの向上に加え、展示の一部を新しくすることができました。

昨年は、当館にとって追い風となったできことが２つありました。一つは、休館前の５月に長瀞と当館がミシュラン・グリーンガイド・ジャポンの改訂第２版に掲載されたことです。二つ目は、休館直後の９月に長瀞を含む秩父地域が日本ジオパークに認定されたことです。

当館や秩父地域の注目度がアップしたこのチャンスを活かし、博物館としての魅力を高めるために新たに始めた４つの取り組みについて紹介します。

（１）ジオパーク秩父の支援

秩父郡市が協力して取り組んできた活動が実を結び、秩父地域が日本ジオパークに認定されました。当館は、その活動を支援する拠点施設でもあります。そこでリフレッシュオープンに先がけ、ジオパーク秩父を支援するための取り組みを始めました。新たに２種類のインフォメーションボックスとよぶ展示具を製作し、秩父地域の４か所で展示を行ってきました。

ジオパークの出張展示（秩父市山里自然館）

当館の展示室の一角に、ジオパークの視点で秩父地域の魅力を紹介するコーナーをつくりました。また、リフレッシュオープンにあわせて企画展「ちょっくら　よってがっせぇ－ジオパーク秩父へのいざない－」を開催します。これは、「ジオエコロジー」「自然と人々のくらしの関わり」をキーワードとして新しい視点で展示しました。タイトルにも使った秩父弁に触れる体験コーナーなどもあり、楽しくジオパーク秩父を知り、活用するための展示です。

（２）観察園「カエデの森」の整備

当館の向かいにある月の石もみじ公園は、毎年大勢の皆さんが訪れる紅葉の名所です。ここのカエデは、40年ほど前に当館の前身である秩父自然科学博物館が働きかけて植栽したものです。このように当館にもなじみ深いカエデの仲間ですが、日本には27種あるとされています。そして県内には21種が生育します。本県は、カエデが豊富な県ということになります。

そこで昨年度、今までの芝生広場を造成して、カエデの観察園をつくりました。植栽したカエデは、県内に自生していた個体です。この観察園は、カエデをとおして埼玉の自然の多様性を学ぶことができる屋外展示に位置づけています。

完成直後のカエデの森（平成24年３月）

しかしまだ移植後間がないため、細い個体ばかりであること、また移植後の生育が思わしくない種類があることが課題です。これからも整備を続けますので、月の石公園のように年を重ねるごとに森になっていく過程が観察できると思います。「カエデの森」で自分の好きなカエデを見つけて、長い目で見守っていてください。

（3）体験ゾーンの新設

体験ゾーンは、3つのコーナーで構成するハンズオンを重視した展示です。小中学校1クラスの児童生徒が、博物館ならではの実物とふれあう様々な体験をとおして、自然科学の楽しさに出会うスペースを目指してつくりました。今回のリフレッシュオープンに向けた準備で一番苦労した部分です。

今までオリエンテーションホールの奥の中央には、パレオパラドキシアの骨格復元群と産状模型がありました。さらにその奥には小鹿野町般若産のパレオパラドキシア化石が展示してありました。これらを壁沿いに移動して化石と骨格復元群、産状模型に一体感を持たせ、展示のわかりやすさを高めることができました。そして次にビデオコーナーを改装しました。こうして生み出したスペースを体験ゾーンとしました。

体験ゾーンの一番の目玉は、「ディスカバリーコーナー」です。ディスカバリーの名のとおり、観覧者が実物に触れて楽しい発見ができる展示です。ここには仕掛けのある引き出しや棚があり、いろいろな化石や骨など当館の資料や模型が置いてあります。動物、植物、化石、岩石・鉱物などの参考図書も置いてあります。

ディスカバリーコーナー完成予想図

次は「カエデコーナー」です。館庭の観察園「カエデの森」の眺めが良い場所にカエデをはじめとした植物などの資料の観察ができるテーブルと、座ってくつろげるベンチを設置しました。ここでは、ペーパークラフトなどでタネの散布する仕組み学び、植物の不思議を体験することができます。

最後は、今までも人気があった「触れる剥製コーナー」です。ここでは博物館が収集したけものや鳥の剥製に触れることができます。今回、長期間展示してきた剥製の一部を入れ替えました。

（4）ボランティアによる展示解説

今までも当館には、職員とともに活動するボランティアの方々が登録されていました。しかしその活動内容は、野外調査、資料の収集や整理、教育普及事業などに限られていました。そこでこの休館中に展示解説ボランティアの募集を行ったところ、10名の応募がありました。5回の研修を終え、リフレッシュオープンにあわせて展示の解説にデビューします。

仮事務所での展示解説ボランティア研修

その他にも、皆さんの関心が高い地震コーナーや、地球規模の自然現象をスクリーンで再現して、その変化の様子をコンピュータで操作し体感するダジックアースコーナーも取り入れました。

これらの新たな取り組みは、当館の展示を大きく変えるものではありません。しかし今までのように、観覧するだけではなく、体験をキーワードにして様々な形で参加できる「みんなの博物館」に大きく生まれ変わろうとしています。今、その第一歩を大きく踏み出したところです。

（うえだ　まさひろ・担当課長）

休館中に３つの共催展を実施しました

碓　井　　徹

大規模工事のために長瀞町にある博物館自体では展示活動が１年間ほどできませんでしたが、今年度は県内の他の施設の協力を得て３つの共催展を開催しました。

１．共催展『特定外来動物にご注意』

会場：春日部市郷土資料館
会期：平成24年３月17日～６月10日　67日間
観覧者総数：2,078人

テレビなどでもしばしば取り上げられるようになってきた外来動物の中でも、特に『特定外来動物』という位置づけで捕獲や飼育に法律上の制限があるアライグマとカミツキガメを中心に据えた展示をしました。テレビの映像では伝わりにくいこれらの動物の大きさやツメの鋭さなど、本物の剥製ならではのインパクトが大好評でした。

２．共催展『武蔵野の雑木林と春の息吹』

会場：三芳町立歴史民俗資料館
会期：平成24年３月24日～５月20日　47日間
観覧者総数：2,478人

すばらしい雑木林を有する三芳町での共催展ということで、人と雑木林の深い関わりあいに焦点を当てながら、雑木林が育んでいる多様な動物や植物を、哺乳類や鳥類の剥製、昆虫標本、植物の押し葉標本、生態写真などで紹介しました。

この展示に関連する普及事業として当館職員が講師になって同館近くの雑木林で実施した観察会でも、春の雑木林に息づく様々な植物や昆虫を観察することができました。

３．共催展『自然科学展　～さいたまの多様な生き物たち～』

会場：熊谷市立熊谷図書館
会期：平成24年７月21日～９月２日　38日間
観覧者総数：5,345人

広いスペースをもつ同館の美術展示室に200体を超える哺乳類や鳥類の剥製をズラリと並べて、多様な自然環境をもつ埼玉県の豊かな動物相が理解できる共催展を企画しました。

会場には、熊谷市在住の昆虫研究家によるたくさんの昆虫標本やトンボが飛んでいるところを撮影したすばらしい生態写真も多数展示され、多くの観覧者の目を楽しませていました。

会期途中には、当館に博物館実習に来ている3人の大学生も見学に訪れ、学芸員による展示説明を熱心に聞く姿も見られました。

春日部市郷土資料館での展示の様子

三芳町歴史民俗資料館での展示の様子

共催展会場で学芸員の解説を聞く実習生
（熊谷市立熊谷図書館にて）

（うすい　とおる・担当課長）

博物館仮事務所の来訪者　～野生ほ乳類の訪問～

奥　村　みほ子

当館は休館中、事務所を旧寄居養護学校（以下、仮事務所）に移しています。この仮事務所周辺には、野生ほ乳類が毎日のように出没しています。

そこで、その実態を調べるために、仮事務所裏やベランダ、職員用駐車場に続く階段に、日を変えて自動撮影装置（Field Note DUO）を設置しました。すると、複数種の哺乳類が写りました。写ったのはタヌキ、アナグマ、アライグマ、ノウサギ、テン、アカネズミ、ノネコでした。写真は顔の正面からの写真だけでなく後ろ姿もありましたので、皆、行き来しているようです。それぞれ個体差もあり、写真に写ったポーズも様々でした。例えば、カメラをのぞきこむノネコ、フラッシュがまぶしくて目をつぶるタヌキ、走って通り過ぎる下半身のみ写るノウサギ。あるアナグマは挑戦的なのか、目が悪いのか、自動撮影装置に向かってどんどん近付いてきました。

写真に写った哺乳類の中で、アライグマは繁殖力が高く、警戒心が強いため、ワナで捕獲するのも一苦労です。警戒心が強いせいか、アライグマはタヌキに比べて、生息している個体数の割には目撃件数が少なく、交通事故で死ぬことも滅多にありません。仮事務所に移ってから10カ月近く経っていますが、タヌキを目撃した職員は何人かいても、アライグマを目撃した職員はまだいません。しかし、自動撮影装置には、アライグマは何枚も写真に写りました。目撃できないからといって、いないわけではないのです。

階段の下からアナグマがやってきました

階段は写真の右へ曲がりますが、直進してきます

自動撮影装置の三脚部分を調べているようです

諦めて道なりに進んで行きました

アライグマの特徴的な尻尾の縞模様

この野生動物の来訪については今後、季節展示で詳しく紹介したいと思っています。

（おくむら　みほこ・学芸員）

ゾウ化石研究が明らかにすること

北　川　博　道

はじめまして。4月からお世話になっている北川博道です。どうぞよろしくお願いいたします。

アジアゾウと私
（上野動物園にて）

専門は古脊椎動物学、特にナウマンゾウやマンモスなどのゾウ化石を中心に研究をしています。ゾウ化石は日本で最も多く見つかっている脊椎動物化石で、もちろん埼玉県からも見つかっています。古いものからアケボノゾウ、トウヨウゾウ、ナウマンゾウの3種類がみつかっているのですが、このようなゾウ化石は、日本にやってきては消滅し、やってきては消滅するということを繰り返し、一度に複数種が存在することは基本的に無かったといわれています。加えて、ゾウは、移動と共に多くの他の動物を引き連れるといわれています。つまり、化石ゾウたちはその都度、多くの他の動物を引き連れて過去の日本にやってきたのです。私はこのようなゾウ化石を研究することによって、日本の現在の生物相の成り立ちを明らかにしようとしています。

埼玉県から産出している化石は部分的な標本が多いのですが、ひときわ素晴らしい標本があります。アケボノゾウ狭山標本です。地学展示ホールの最後に展示されている標本です。アケボノゾウは日本でしか化石記録がなく絶滅した日本固有種です。ゾウの中では小型で、肩の高さが大人の背丈くらいのゾウでした。実はこのゾウは倍近く大きなゾウから進化したと考えられているのです。このように、元々大きかった生物が小さくなることを矮小化といいます。島などの閉鎖的な環境の生物によくみられる現象なのですが、その化石として最も代表的なのがイタリアのシチリア島などでみつかっているファルコナーゾウ（下写真）です。

ファルコナーゾウと私
（イタリア、ローマ大学にて）

なんと大人になっても肩の高さが1m程度の非常に小さなゾウです。私の後ろの2体は大人です。しかし、このゾウも4mを超える大きなゾウから進化しました。このようなゾウがどのように、なぜこれほどまでに小さくなったのか、その謎を解くヒントが私は狭山標本に隠されていると考えています。埼玉の大型化石というと、どうしても新第三紀の海の生物たちが有名ですが、陸の動物にも世界に誇れる素晴らしい化石があります。このような今は無き生物たちの謎を一つ一つ解きながら皆さんにご紹介できればと思っています。これからよろしくお願いします。

（きたがわ　ひろみち・学芸員）

「ジオパーク秩父」の活動と博物館の役割

本　間　岳　史

■はじめに

昨年９月に秩父地域が日本ジオパークに認定されてから、丸一年が経過しました。この間、秩父まるごとジオパーク推進協議会では、秩父ならではの取り組みである「一味違った札所めぐり」や「ジオ端会議」など、様々な活動を行ってきました。また、この２月には、日本ジオパークネットワークの第１回全国研修会の会場を引き受け、日本全国のジオパーク関係者の交流と秩父のアピールに一役買うことができました。

そこで、協議会の一員として博物館がこの間に取り組んできたことを振り返り、「ジオパーク秩父」における博物館の役割を考えるとともに、今後世界ジオパークをめざす秩父地域の課題についても考えてみたいと思います。

■認定後の博物館の取り組み

博物館では、ジオパークのエッセンスを紹介する展示具（ボードと展示ケース）と展示パネルを作り、７～８月に、山里自然館、三峰ビジターセンター、おがの化石館、西武秩父駅仲見世通りの４か所で臨時出前展示を行いました。蝶番で4枚を連結するボードは、設置場所に合せて平面、屏風、四角柱などに変形できるので好評です。11月には浦和パルコへの貸し出し依頼もきています。秩父地域外では、この１～２月に、写真パネル「秩父の地質名所50選」を、さきたま史跡の博物館や県庁渡り廊下で展示し、８～9月には長瀞げんきプラザへ貸し出しました。

これらの出前展示を行う一方、博物館では、積極的に研修会や講演会の講師を引き受け、ジオパークの意義や全国の動向、秩父の見どころや取り組みなどについて、周知・宣伝を図ってきました。たとえば、小学４～６年生を対象としたこども大学ちちぶで「秩父まるごとジオパーク―君も私もジオ博士―」（昨年12月）、自然の博物館友の会総会で「ジオパーク秩父―そのみどころと課題―」（４月）、秩父ジオパーク認定記念講座「遥かなる地底の旅」で「地層変転から見た秩父」（７月）を講演しました。また、大学での講義（昨年10月）や第四紀学会でのポスター発表（８月）で秩父の見どころや活動を紹介したり、博物館のニュースレター「瀞」（昨年10月）、地学団体研究会のニュースレター「そくほう」（昨年12月）、雑誌「天然ガス」（７月）、友の会会報（９月）、雑誌「地理」（９月）などへ「ジオパーク秩父」の紹介記事を投稿し、学生・研究者・自然観察愛好者などへの普及につとめました（私個人への依頼分も含む）。さらに、協議会主催バスツアーでガイドを担当したり（昨年11月、２月）、協議会の総会・運営委員会などで提言を行ってきました。博物館主催の観察会では、秩父ジオサイト探訪として、「和銅黒谷」（５月）、「長瀞岩畳と秩父赤壁」（11月）、「長瀞虎岩と鳩糞石」（来年２月）を実施もしくは予定しています。

博物館のリフレッシュオープンにあわせた企画展「ちょっくら　よってがっせぇ―ジオパーク秩父へのいざない―」（会期：10月６日～１月14日）では、大地（地形・地質）に直接興味のない来館者にも、動・植物や歴史・文化などを切り口に秩父の大地のストーリーにふれていただけるよう、ジオ・エコ・ヒトの連鎖の視点から掘り下げた新展示を展開します。

■「ジオパーク秩父」の課題

ここ数年間、秩父での取り組みに加わり、また先進地の活動を見聞するなかで、秩父地域の課題が浮き彫りになってきました。安定的・持続的な運営を行い世界ジオパークをめざすには、多くの課題がありそうですが、私なりに緊要と思われる点を以下に記します。これらの課題の多くに、博物館の支援・協力が求められるでしょう。

◆ジオサイトの整理とガイドブック等の刊行　◆日本における秩父の意義（ストーリー）の深化と世界における秩父の意義（同前）の構築　◆ジオガイド育成システムの実現（検定、ガイドの有料化、質の高いガイド、継続性など）　◆全国的会議・研修会等への参加　◆解説看板の多言語化（日・英・中・韓など）　◆事務局体制の強化と運営費の確保（国際会議等でプレゼンができる通訳や専門家の雇用など）　◆協議会員の役割分担の明確化　◆「ジオパーク秩父」グッズ等の開発・販売　◆マスコットキャラクターの設定など

（ほんま　たけし・専門員兼学芸員）

表紙の解説

カジカエデ（*Acer diabolicum* Blume ex K.Koch）

当館の庭に新たにオープンした「カエデの森」は、観察を目的としたカエデの見本園です。昨年の春から県有林や東京大学秩父演習林で、植栽する個体を探して調査を重ねてきました。そして落葉後に40個体余りのカエデを秩父の山から移植しました。そのカエデたちが今年の春に果たして無事に葉を広げるのか、とても心配していました。というのも、採集した個体の多くは、掘り出したときに根が少なかったからです。

この写真は、4月24日に生育を確認した観察園「カエデの森」のカジカエデです。カジカエデは、日本固有種で、本県では秩父郡市や比企郡などから採集記録があります。大人の掌ほどになる葉をつけ、20mにまで生長する豪快なカエデです。葉の形がクワ科のカジノキに似ているとされ、和名はそれに由来します。別名オニモミジとよばれ、英名もDevil's Mapleです。この個体の採集地では、秋に黄色く色づいていました。この他にもみなさんが思い浮かべるカエデとは一味違ったカエデが観察園「カエデの森」で数多く見られます。

（植田雅浩・担当課長）

催し物のお知らせ（10月6日～12月）　あなたも参加してみませんか

展　示

	タイトル	期　間	内　容
企画展示	秩父ジオパークへのいざない	10月6日（土）～平成25年1月14日（月・祝）	ジオパーク秩父の魅力をジオ・エコ・ヒトの視点から紹介
季節展示	カエデの森ができるまで	10月6日（土）～平成25年1月14日（月・祝）	今年オープンしたカエデの森の完成までの道のりを紹介

※開館時間　9：00～16：30（月曜休館）

イベント

	タイトル	日　時	場　所	参加費	対象・定員など
記念イベント	リフレッシュオープン記念特別イベント	10月6日（土）～8日（月） 9：00～16：00	博物館	入館料	どなたでも
観察会	秩父ジオサイト探訪 長瀞岩畳と秩父赤壁	11月10日（土） 10：00～15：00	長瀞岩畳	300円	小学生以上 30名
	ウラジロと照葉樹林の植物	12月15日（土） 10：00～15：00	大高取山 （越生町）	300円	どなたでも 30名
体験工房	カエデの図鑑づくり	11月17日（土） ①10：00～12：00 ②13：30～15：30	博物館 科学教室	200円	小学生以上 30名 ※①、②は同内容
	化石のレプリカづくり	11月24日（土） 13：30～15：30	博物館 科学教室	200円	小学生以上 30名
その他	県民の日記念イベント	11月14日（水） 10：00～16：00	博物館	無料	どなたでも
	研究発表会	12月8日（土） 13：30～16：00	埼玉県自然学習センター （北本市）	無料	中学生以上 50名

※観察会、体験工房は事前に申し込みが必要です。詳しくはお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください。

埼玉県立自然の博物館ニュースレター　瀞　第19号　平成24年9月30日発行
編集発行　埼玉県立自然の博物館　〒369-1305　埼玉県秩父郡長瀞町長瀞1417-1
TEL　0494-66-0404（総務担当）　0407（学芸担当）　FAX　0494-69-1002
URL　http://www.shizen.spec.ed.jp/　E-mail　t6604044@pref.saitama.lg.jp

再生紙を使用しています